

りびんぐらいぶず 平成31(2019)年1月第3号

新たな可能性を求めて

宝石山正覚寺の基本方針

私たちは、“聞名ループ”の理念に則り、仰せのままに称えれば、直ちに聞こえて下さる如来様のお喚び声に喚び覚まされつつ、下記の通りの同行方針を掲げて社会に参画することを誓います。

同行方針(実践運動の重点目標)

一、お聴聞を通じて和やかなコミュニティを実現します。

- ・ “お聴聞は瞑想(メディテーション)”を実践します。
- ・ “ウェブサイト正覚寺”で人々の繋がりを図ります。
- ・ スマホ版で人々の悩みにお応えします。

二、“ダーナ(布施)”を実践します。(対象) 子供たちを育む、災害支援他

三、宗門の“リスク課題”に取り組みます。

- ・ “海外開教・伝道最前線”を支援します。
- ・ “宗門中枢部のマネジメントシステム”を支援します。
- ・ “広大会(スカーヴァティーヴュー八勉強会)”を継続実践します。
- ・ “伝道教学”を鍛錬し・見える化します。

平成三十一年元旦(火)

正覚寺住職 堅田 玄宥

(註)“広大会(こうだいえ)”とは、毎月赤野井別院で開催される“無量寿経勉強会”を指します。

伝道教学の必要性

“伝道教学”とは、ご本山表のご常教では歴史的に看過されてきた浄土真宗の伝道上重要なエンジンに相当する教学を指します。

宗門では、伝道教学は未確立のままです。これは、宗門の要職に就く方々にリスク感覚が備わっていなかったからだと窺われます。

では、なぜ伝道教学が取り沙汰されるようになったのか。

それは、浄土真宗が歴史的に一大教団であった百年以上前の時代ならばいざ知らず、戦後の海外開教最前線や人口流動化の現代社会では、エンジンとなる教学上の押さえなくては御門徒さんのコミュニティの維持や自覚に打ち込む楔(くさび)がないに等しかったからです。

今日では、例えば、肉親の葬儀等のワンチャンスをつかえてでも人の宗教的要求に応えることができなくては御門徒さんの自覚が育たない時代に突入しているのです。

当院がHPを開設した今から十年前に、“寺院運営の基本方針”を掲げたのは斯かる時代的

背景に立脚しています。“聞名ループ”は、この間の教学研究のエッセンスであります。

“聞名ループ”とは、何か。

仏説無量寿経第十七願及び第十八願成就文の「聞其名号」をめざして、本願力回向された大行に頭を垂れて念仏すれば、それは阿弥陀如来から手向けられた愚かな衆生にも許される“讃仰の行”になるのであります。

賜ったお念仏を称える行為は、私の称えるお念仏に見えて、その本質は直ちに如来様の大行が働き出して下さるお姿になるのです。

ですから、称えれば、直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀仏こそは、阿弥陀如来直々のお喚び声(本願招喚の勅命)に他ならなかったと受けとめることができ、かくして“智慧の念仏/信心の智慧”が獲得できるプロセスアプローチになるのでした。

メディテーションとは何か。

造物主のキリスト教に飽き足りない海外異教徒異民族が自然科学の発達に伴って興味を懐いて来たのは、メディテーションというプラクティスを掲げる仏教でした。

ところが「貴方の寺院では、メディテーションをやっていますか」と問われたとき、これに即座に答え得なかったのが浄土真宗の寺院であり、僧侶だったのです。これでは、折角の宗教的要求の最初の問いの提供者を繋ぎ止めるオファーがないに等しかったのです。

“メディテーション(瞑想)とは、三昧(ざんまい)を意味します。

海外開教伝道最前線(一人開教区のみならず日本の現代社会も同様)で開教使(布教使)が自信を以てご案内できるように親教団が対応してこなかったことが宗門の現実的リスクを招来したままだったと称しても決して過言ではありません。

これは、直接的には教学上の権威の最高位に位置される勸学寮や総合研究所の迂闊ではなかったかと窺われるところではありますが、平成二十八年の総長の御言葉にもありますように今や一切の聖域を設けずに宗門人共通に問われる一大課題であることは申すまでもありません(Ref『宗報』平成二十八年五月号)。

筆者はこの“聞名ループ”自体が信心獲得に至るメディテーション(瞑想)のプロセスアプローチに当たると領解するものです。

但し、親鸞聖人の御著書にお訪ねするならば、聖人晩年の『自然法爾章』、『弥陀如来名号徳』には究極的な深いお心が明らかにされているように窺われます(Ref 玉城康四郎『親鸞をめぐる諸問題』P255～258 春秋社刊『世界の中の親鸞』)

なぜ伝道教学が確立されてこなかったのか

伝道教学が確立されてこなかったのは、第十七願文の捉え方に問題があったことに起因するかと窺われます。

第十七願は、「行巻」の標挙に「諸仏称名の願」と記されている願であります。

願文の中核となる御文「咨嗟称我名」について、親鸞聖人は、

『唯心鈔文意』に、第十七の願に、「十方無量の諸仏にわがなをほめられん、となへられん」と誓いたまへる、一乗大智海の誓願成就したまへるによりてなり、『阿弥陀経』の証誠護念のありさまにてあきらかなり」(Ref 註釈版聖典 p703)と謳われ、

『御消息』では、第十七の願に、「わがなをとなへられん」と誓ひたまひて、と仰せ下さっているのであります(Ref 註釈版聖典 p798)。

親鸞聖人がここまで明確におっしゃっていて下さるのに、「諸仏の称名を因として衆生が無上涅槃の果を開くことになっては、「他作自受」との非難を甘受せざるを得なくなるとのN勸学のご指摘は当を得ないものであり、まことに残念の極みであります(Ref 内藤知康著『顕浄土眞実行文類講読』p76)。

三業惑乱以後のご常教がこのようになってしまった背景には、江戸教学以来の四百年の教学が、「行信」に傾き「聞名」を看過してきたことにあるということができようかと窺われます。

聞其名号(聞名)の対象は、本願成就の物語(広讃)に続いて、称名(略讃)にあると承るのが自然だからです。

苦悩の有情には、お釈迦如来 そのお弟子様 七高僧 歴史上の他力の念仏者と続いて懐かしいわが祖父母のお念仏の姿を通して聞こえて下さるお名号こそが如来様直々のお喚び声だったと頂戴できるからです。「お名号は称えなければ働いて下さらない」とは、曾て行信教校で承った梯 實圓和上の御言葉であったことを思い起こすことであります。

本願力回向の不行ならばこそ、「不行とは無碍光如来の名を称するなり」とは、如来様から賜った称名念仏を私の上で称えさせて戴ければこそ、直ちに働かれる不行のゆゑに聞こえて下さったは、本願招喚の勅命に他ならなかったと頂戴できるからであります。合掌。

修正会(元旦会) 元旦(火) 午前七時、 仏教婦人会新年会 一月十六日(水)十三時、 仏教壮年会総会一月二十日(日)十八時半(構想段階)、 正覚寺役員会一月二十日(日)十九時半、 正覚寺初講 一月二十七日(日)午前十時 著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥
